

---

## 高良先生との尖閣列島野外実習

### アホウドリ調査回想記



尖閣諸島文献資料編纂会長 <sup>にいろ</sup>新納 <sup>よしま</sup>義馬

- ・ 1925年(大正14年) 鹿児島県奄美大島に生まれる。93歳(2018年時)
- ・ 1954年琉球大学卒業後、同大講師、助教授、教授を経て、琉大名誉教授
- ・ 専攻は植物社会学、琉球列島・尖閣諸島植物論文多数著わす
- ・ 沖縄県文化財保護審議会委員、自然環境保全審議会委員等を歴任
- ・ 1971「琉球大学尖閣学術調査」、1979「沖縄開発庁総合調査」の植物班長として調査主導。これまで尖閣諸島に6回渡島調査

---

#### はじめに

編集部から1950年代と60年代の初期調査について、原稿依頼された。

恩師高良鉄夫先生と私は、尖閣列島に2回に出向いている。1953年の琉球大学学生野外実習調査と1963年の琉球政府委嘱によるアホウドリ調査である。1回目は65年前、2回目は55年前、いずれも半世紀以上も前のことで、往昔の記憶は忘却の彼方にある。

これまで折々の機会に触れていることから、今更と固辞したが、強い要請に負け、筆を執った次第である。記憶が不鮮明で、読みづらき所も多々あり、読者諸賢の容赦を乞う。

#### 夏季休暇利用し、野外実習調査 教官2名 学生11名参加

戦後初となる高良鉄夫先生の尖閣列島への渡島は、1950年3月27日～4月10日の日程で、当時八重山農林高校長の時、魚釣島にある発田重春氏の鰹節工場に通う漁船に便乗し、魚釣島に2週間滞在し、生物相や資源調査をされ、「無人島探訪記」の表題で南琉タイムスに10回連載し、更に「自然との対話 無人島は生きている」(琉球新報社 1977)との表題で単行本を出版され、尖閣諸島の経済面での有効性について世論を喚起されている。

其の後、1952年4月琉球大学と琉球農林省資源局との合同調査を実施し、多和田真淳先生らを引き連れ、南小島と魚釣島に上陸し、海、鳥や有用植物などの生物相や地質、土性、グアノ、水資源など富源調査などを成し、尖閣海域が冬期漁場として最適と報告されている。

この調査に琉球大学から、上運天賢盛君ら学生3人が参加し、後年夫々参加記録を報告している。

私が最初に出向いたのは、高良先生の3回目となる調査で、1953年8月1日～4日、高良先生に加えて宮城元助先生と、琉大生物科、畜産科、農学科、教育科の学生11名で、夏季休暇を利用し、尖閣列島での学生野外実習の名目での渡島である。

それで、今回私共が参加する実習について参考にすべき事柄など、特に心構えなどについて高良先生に問い尋ねてみると、無人島での実習は、これまでの本島内での実習とは本質的に異なり、無人島である事を認識し、各々が各自の責任で自活し、実習が如何なるものかを実態として感じる以外、生きて帰る術はない。生死に懸わる事態が生ずる事もあり得るので、一人一人が物見遊山でなく、学習の本質と自然の諸々の実相を実体験し得る最高の適地であるという認識で参加して欲しい。



高良鉄夫先生

一番年長になる私にとって責任のある事態であるが、大学生活 4 年間で締めくくるにふさわしい最後の野外実習であり、喜んで参加することにした。

参加者は下記の通り ( )は当時の年齢

高良鉄夫(40) 琉球大学助教授 宮城元助(41) 琉球大学助教授  
 新納義馬(29)生物科 4 年 新島義龍(22)同 4 年 田中一郎(21)同 4 年  
 瑞慶覧長方(21)同 4 年  
 泉川寛(23)畜産科 4 年 比嘉清幸(22)同 3 年 岡田潤治(20)同 3 年  
 有川廣良(22)農学科 3 年 東清二(19)同 2 年 大屋一弘(19)同 2 年  
 森田忠義(22)教育科 4 年



宮城元助先生



尖閣諸島へ出発前、八重山で全員揃って記念写真 鳩間島 (田中一郎 1953)

### 経済界からの お金も、油も、米も、缶詰も

尖閣諸島までの船は、先生の計らいで開洋高校(沖縄水産高校の前身)の練習船に便乗し、渡島するとの事、その代わり、琉大側が必要な物資の便利を計る事との事、これ等の事については先生の計らいで、燃料は琉石(株)(稲嶺一郎社長)、米は沖縄食糧(株)(竹内和三郎社長)、

缶詰等食糧品はリウボウ(宮里辰彦社長)が提供して頂き、私共学生は取りあえず寄付金をお願いする事に奔走した。当然私共の行く先はこれら映画館が対象で、其処で実習への理解と何がしかの寄附をお願いする為の言上を申し上げるのは一番年上の私の役目であった。

学生アルバイトでお世話になった沖映の宮城嗣吉社長、国際劇場の高良一社長にお願いし、過分の心付けを頂いたと憶えている。このことについては忘れ難い思い出がある。国際劇場へお願いに行ったら、高良一社長の奥様が、無造作に置かれた軍票の札束を取りだして、「いくら欲しい？」と訊いたのに驚いた。如何せん学生の身では、分厚い札束を見るのは初めて、狼狽して大きな額が言えない。寄付を頂いた後で、もっと沢山言えばよかったと後悔した。当時幾らでも金が儲かる時代だったせいか。経済界の人たちは社会的事業に理解があって、率先して協力してくれた。

当時本土で8ミリ大学と揶揄されていた琉大に対し地元の経済界の皆様がどれ程期待されておられたかの証拠の実態であろう。夢々琉大に在籍した事のある学生は今に生き、生ある限り肝に銘じ忘れ去るべからざる事として心にすべきであろう。

### 開洋高校実習船に便乗 石垣・尖閣迄、船酔いで苦しむ

扱て、渡島、多分本部港から乗船し、出航したと思うが、その事は余り記憶が定かではない。泉川氏によると、開洋高校練習船開洋丸(30ト)には、船の船員の外、高校側から生徒40余名と琉大側から13名、計60名余も乗り、スシ詰め状態の定員オーバーだった。小さな船に人間と船荷を一杯積み込んだせいか、船縁は海水すれすれ。腰掛けると足が海水につかり、甲板から手を伸ばせば海水がくめるほどだったという。今思えば、無謀だが、終戦直後の物不足、混沌した時代だったからできたのだろう。

其の後は船酔いで苦しみ、夜も日もなく、虚ろな身体を甲板に晒した以外殊更記すべきこともない。その様な態たらく、途中石垣に着くまで船からの島影などの思い出は更々ない。



資金集めで廻った国際劇場映画館と高良一社  
〔「ゼロからの時代」より〕



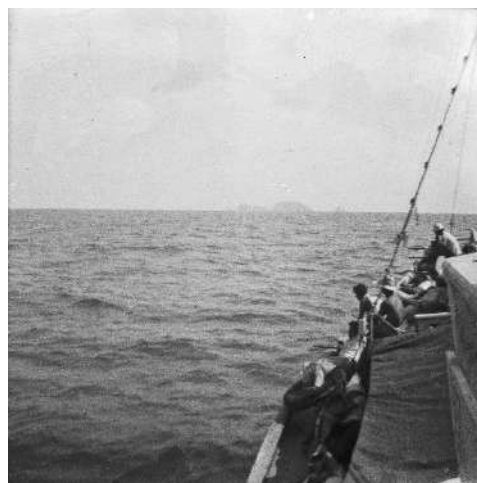
開洋丸で航海・漁業実習に向かう開洋高校生。渡島のため迎えに来た時は南小島と一緒に上陸した。(岡田潤治 1953)

石垣に着き、高良先生の前任校の八重山農林高校の寄宿舎に宿泊し、石垣市の市場で、尖閣での食料の買い出しと、船からの申し出の薪などの調達の為、新島君と残り、他の学生とは別行動であった以外記憶にない。然し他の学生は琉球大学の学生が始めて八重山を訪れて来たとして大いに歓待されたという話を聞かされたが、この事は実習の一齣として記しておくべきか否か私一人の判すべき外の事態であろうか。

石垣に何日滞在し出発したか定かではないが、乗船した私は、船に弱い哀れな身体を再び横たえた儘だったが、海鳥の飛来を知り、遠くに島影が見えると聞くと俄然目が輝き甲板に手摺を求めて身を乗り出した。船酔いも何のその、生気が蘇り島影を目の奥に刻み、一物も見逃すまいと心が弾む、遠くに浮かぶ島影が次第に実態として目に這入る。

近づくにつれて海から飛び出した断崖に囲まれた二つの隣合わせた島が目に入ります。

これまで目にしてきた緑に被われた島とは全く異相をなす岩を剥き出し、あるか無いかの僅かばかりの緑が島のへりにへばり付いた島、近づくにつれて海鳥が舞い出し次第に其の数が多くなる。船が二つの島の瀬戸に近づく、北小島と南小島、憧れの尖閣諸島を目前にして感無量である。



開洋丸の船上から南北小島の島影を遠望。  
(泉川寛 1953)

### 北小島 島覆い尽くすアジサシ 親鳥の襲撃、糞の異臭と嵐に 辟易

早速船長の計らいで北小島に向かう。上陸から島を離れるまで、これまで経験した事のない驚きの連続。無人島に対する余りも無知の己に恥じ入るばかり、自然の実相の深さに驚き、この機会に巡り合えた自分に感謝すると共に、高良先生のこの列島での自習の意図を計り、心ゆくまでこの機会を学ぶべき運命と知らされる事になる。



ボートから島の一つ北小島に上陸する。しかし、船付き場の水際からアジサシの雛が足下にまとい付き、上空からは親鳥の襲撃、糞の嵐、耳をつんざく海鳥の雷鳴、どうしてボートを降りたか定かではないが、どうにかボートの縁にしがみ、上空から

襲撃する海鳥たちの羽ばたきに抗しながら、陸地に足を下ろすことになる。

下りれば目の前は海鳥たちの世界、何処に足を下すかその踏み場もない。

島を覆い尽くす海鳥達の実態、足下の海鳥を追い散らしどうにか斜面を上り中腹までたどり付く、一面鳥、鳥、鳥、時は真夏、鳥糞から発する異様な臭いと鳥糞が堆積した枯れかけた草地、耳元に絡む羽音の襲撃、調査も何のその、ここは人間の立ち入る島に非らず鳥類の楽園である。この島の現実を体感した事が私にとって唯一実習の実態だった。

中腹に居たたまらず、海鳥の種類やコロニーの有態など意識することなく船着場に急ぎ退散した。しかし、これからが又大変、島の主たるアジサシ類とテリトリーの奪い合い、どうにか船着場の斜面に居場所を獲得しホットする。

一息して向かいの南小島を見る、斜面の一部の段差の縁に緑があり、アジサシ類の飛翔は見られない。島により棲息する海鳥の種類が違うのか興味をそそる。

### 南小島 岩山斜面全域 カツオドリ生息地 可愛い雛に 心なごむ

一応、北小島の様子もほぼ理解することができ、対岸の南小島に渡る。

北小島と異なり海鳥に襲撃される事もなく島に渡る事ができた。

北小島に面した海岸にかつて島での生活跡(古賀村跡の石積み)が望見できる。

先ずは島の実態の把握とばかりに岩山の付け根に寄り添いながら低地部を進むが、アジサシ類の襲撃もなく鳴き声も皆無、一部にモンパノキ、ギシギシ、コウライシバ、ソナレムグラなどの生育が見られるが、先ずは島の主体部をなす岩山を登る。

アジサシ類の姿はなく、岩山を登ると段差の所々に真白な産毛に被われた雛がいる。高良先生によればカツオドリの雛という。この斜面全域のカツオドリの営巣地として利用されている感じである。所々に食用に供された食い残しらしき魚の残りも見られる。実に可愛い雛に近づくと、臆する事もなく対面できる。

実に美しい可愛い、愛らしい、どう表現してよいか、私にはその言葉の持ち合わせがない。これまでこんな美しい感激した自然に巡り合った事がない。

余りの美しさに見とれる。心がなごみ、感激する。

然し時間との競合いの実習、其の場を離れるや否や、親鳥の帰りに出くわす。驚いて、一瞬大きく口を開け、飲み込んできたばかりの獲物を吐き出す、釣に行かず陸上での海からの贈り物。

この贈り物の実体験は、実験せず、其の場を離れる。

斜面を上り周囲を観察してもカツオドリ以外は確認出来ず、要するにこの斜面全域カツオドリの営巣地らしい事が解り、斜面を降りる。



親鳥の帰り待つ雛、白い綿毛に包まれ可愛い。(新納義馬 1979)

島の東の端に約 60m 近い岩塔が突出しているが、この岩塔と先程調査した島の本体なす岩山の間は、礁面海拔約 2m 程の礁原が広がり連なっている。礁原の中央部付近にはコウライシバ、ソナレムグラなどを主構成種とする植分も見られるが、全域無植生の感じで台風時などに風衝被害や潮害を受ける事も考えられる。又先に登った島の本体をなす岩山の南側は 50~100m の絶壁をなし、後年 1971 年琉球大学調査団がその岩棚でアホウドリの生息を確認している。



南小島で海鳥の臭さに息止めて記念撮影。  
左 2 人目は宮城先生。(泉川寛 1953)



開洋丸の甲板いっぱい積まれたカツオドリの肉  
食べてみたら美味しくなかった。(岡田潤治 1953)

### 魚釣島 古賀村跡にキャンプ 古城の如き石垣囲い 掘割も

南北小島での実習を終え、隣同志の島の実相の余りにも差があるのに驚き、それぞれの島の実態を如何に表現してよいやら全く理解することもなく、次の魚釣島に渡る事になる。

魚釣島に近づくと意外と大きな島である。しかもその外観が緑に被われた島というより黄色の強い黄緑色に被われた島である。想像と異なる島である。島に近づき、やがてその黄緑色の相観が全島ビロウ(別名クバ)が優占した相観である事を知る事になる。

今までかつてこれ程ビロウが全島を被い尽くす島に巡り会った事を実態として経験した事はない。

驚いたまま上陸する。

上陸地点はかつて古賀さんが拠点として活躍された場所である。船から見た外見はまるで古城の石垣に囲まれた様相である。而も船着場には掘割が有り、島での事業の大きさを想像し当時の人々の活躍振りに驚嘆しながら上陸する。



古賀村跡の石垣囲いの中に、カツオ納屋もあり、思い思いにテント張り、格好のベースキャンプとなる。(田中一郎 1953)

上陸して更に驚いた、目の前の石垣の余りにも堅固さとその異様さ、これ程堅固な石垣は今だかつて見た事がない。この石垣の実態を見てこれが魚釣島の自然の実相である事が次第に理解されてくるのだが、この初めての渡島ではまだ理解するまで至らなかった。

島での拠点とは当然この古賀さんの事業所跡の地である。キャンプするに十分な広さもあり、而も十分な水流も見られる。島での実習期間の拠点を此処に決め初日は終わることになる。

さて宿泊地も当然この事業所跡の広場にキャンプを張るのだが、ここは余りにも蚊が多かった。私はこの事業所前の浜辺で米軍払い下げの一人用のテントを張り、帰るまで過ごすことにした。近くにまた別の学生仲間もテントを張ったりしていた。この浜辺でも毎晩蚊の襲撃に往生した事は云うまでもない。

然し、楽しい、苦勞の多い実習の日々であった。



瑞慶覧、田中、泉川君らは難破船の残骸とビロウの葉で浜辺に仮小屋建てて、宿泊している。(田中一郎 1953)

### 全域 ビロウによって林冠部形成

扱て、一夜明けは魚釣島での実習の有り態だが、先生の計らいで、各自の専攻の違いで、夫々別行動で島を体験したのだと思うが、誰と誰が一諸に行動したかも記憶にない。

私は一人で島の山頂へ登ることにした。幸い魚釣島には毒蛇がいない、無毒のシュウダがいるが、先ず気にする事もない。これは私の出身地が毒蛇の多い奄美で、小さい時から夏場は、毎年ハブに悩まされ、生活をした経験からである。

さて島の山頂へ、キャンプ地へ流れる溪流に沿って谷ぞいに登る。宿泊地の回りに僅かばかりの草地もあるが、かつての畑地の跡らしい、山腹に辿る。谷ぞいの僅か斜面の一部にビロウの欠如する林分が川ぞいに沿って成林しているが、他の斜面は一面林床にコミノクロツグを優占させたビロウを林冠に持つ植生に被われている。

所々山腹は段差があり、しかも林内は足場が悪く、これまでに経験したことのない地形が続き難渋な行程である。しかし、初めての尖閣での実習、二度と有り得えな



魚釣島は見渡す限りビロウが林立するジャングル。(田中一郎 1953)

いかも知れぬ実習、黙々として山頂めがけて登る。周囲の林分の実相などは何処へやら、構成種にもお構いなく只黙々として山頂めがけて登る。初めての尖閣列島での学生実習、今後二度と有り得るとは考えられない離島である。山頂までの斜面で 1 回も植生調査する事なく、ただ山頂めがけて登る。周囲の林分など何処へやら、構成種が如何なる種類によって構成されているか頓と気にする事なく山頂へまで辿り着くのが実習の本分とばかりに登る。

しかし、待てよ、よく観察すると林内の階層は本島内の林相と異なり、林冠はビロウだけが飛び抜けて、只一種で形成されている、今登るこの斜面は北向きであろうか、先程船上から望見した島の様子、黄色に感じた林冠部は即ち島全域がビロウによって林冠部は形成されている証しである。これ程島の方位に関係なくビロウの優占する島は、これまで経験した事がない、風が強い事の証しであろうか、大洋の中に浮かぶ島、年から年中強い海風に晒されている実態を知る事が出来、又一つの収穫を得た感じを深くする。

### 山頂 樹高は低く密生 蘭類の多さに 驚く

山頂に近づくと、次第に樹高は低く密生し、灌木状にからみ、着生植物が多くなる。地上から飛び出した岩盤上にも着生している。特に蘭類の出現個体数の多いのに驚く。イリオモテラン、リュウキュウセツコクなどこれ程個体数が多いのは初めての経験である。その他イヌマキ、アマミアラカシ、リュウキュウチク、クチナシ、ヤブツバキなど灌木状の樹形で密生している。この山頂の林分が全く特異的な林相を示しているのに何となく気になるが、調査をする事なく、只物珍しく検分する事すら忘却、只通り過ぎるだけである。

後日この山頂一帯に尖閣列島の固有種を始め多くの貴重種の生育を知らされるが、如何せん学生の身、準備学習の不足、只通り過ぎるだけ、今回の実習は黙々と林内(島内)を歩き、身体を通して島の実態を知る事に盡きる。

又何時この島に来る機会がある事やら知らぬ身なれば、何ともあれ島の多くの地点を観察する、体験する事に盡きる。

山頂部といえ、今自分の居る地点は島の西側の尾根であり、更にこの尾根伝いに進むと島の最高所に行ける筈だが今の己には思考外である。かれこれこの尾根部で時間を過ごしたと思うが全く記憶にない。多分尾根から反対側の斜面を覗き、その斜面が余り急なのに驚き足が竦み、直ちに宿泊地への斜面を折り返したと思う。

扱て、宿泊地への帰り、登って来た所を引き返した積りだが、さに非ず、全く別の離れた斜面を下りてる仕舞、帰る道は段差が多く、全く遠回りする態たらく、自然の観察も何処へやら宿泊地に帰る事だけに頭は一杯、其の他の事象は思考の外、所が自然は意の如くならずとか、所により急崖が多く、登って来た道より更に難渋する仕末、言葉もなく、唯無言、黙々と降りの道を模索しながら降りだけ、所により水滴が滴る急崖に出くわし、喉を潤し一息入



イリオモテラン。魚釣島の山頂域に見られる。(新納義馬 1979)



れる。やっと元気を取り戻し、どうにか宿泊地に辿り着く、一日の実習の終了である。

この後夕食の準備、実習の成果の整理、洗濯、野外実習は実に忙しい、しかし実に楽しく有意義である事は言うまでもない。

### 帰りは難渋 崖下から飛び降り ボートに乗る

さて実習の締めくくり、島からの帰島である。これが又一騒動、各自荷物をまとめ、採集品を保管して持ち帰るのに一苦労を重ね、更に生かした儘持ち帰りたい採集品ら「ラン類」の仕末、悪天候の為、島の裏側に待機している練習船までの行程、出入りや凹凸の多い海岸線、時にすべり、ぶつかり、どうにかボートの待つ岩場に着く、母船は沖合で待機、上下に揺れている。台風接近を身近に感じる。しかしこの絶壁からボートに飛び降りる以外、帰る術はないと各自心に決め、上下に揺れるボートの動きに呼吸を合わせて一気にズドン。揺るボートに着船、生きた心地せず、神の加護に感謝、其の後どうして母船にたどり着き、帰島したか全く記憶にない。人間の性といえ、忘れ去ること、この性の良し悪し私の判断する能力の外のこと。



帰りは海が大荒れとなり、南側の岩山に移動、崖下に迎いのボートが待機、ロープを伝って影下に飛び降りる。  
(田中一郎 1953)

## 尖閣列島北小島に新資源

# 群れなす海鳥一千万羽

### 琉球大学術調査団の成果

尖閣列島を占む八重山群島の半島に指定されている東島島の東端部に群れなす海鳥の繁殖地が発見された。調査団は先づこの海鳥の繁殖地を調査し、その結果として八重山群島の二島に繁殖地を認め、その繁殖地を調査することになった。

△繁殖地は東島島の東端部にあり、島の長さ約一キロメートルにわたって広がる。繁殖地の面積は約一ヘクタールである。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

△繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

△繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

△繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

△繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

△繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。繁殖地には約一千万羽の海鳥が繁殖している。

“尖閣列島北小島に新資源”  
“群れなす海鳥一千万羽”  
“琉球大学術調査団の成果”  
と新聞に報じられた。  
(琉球新報 1953.8.16)

## 1963年、高良先生に誘われ アホウドリ調査に 途中転覆危機に

第2回目の尖閣列島調査は、琉球政府文化材保護委員会の委嘱によるアホウドリ調査である。参加者は高良鉄夫先生を団長に、生物地理学的観点からの尖閣列島の海洋学的アプローチを重視、琉球気象庁海洋係長伊志嶺安進氏を参加させ、私も委員の一人として参加させて頂き、更に、当時アホウドリの生存が確認できれば世論を震撼させるニュースバリューが予想される事態、琉球新報社田積友吉郎記者、同社森口豁記者、沖縄タイムス社粟国安夫記者、琉球放送テレビ社赤嶺得信記者、沖縄科学教材社照屋林松氏も同行することになる。

しかし、赤尾礁、黄尾礁をはじめ、南、北小島、魚釣島など各島々を回航し観察したが何れの島でもアホウドリの生息を確認するに至らなかった。

当時この地域赤尾礁近海は米軍の演習区域に指定されている事もあり、初鼻から米軍の警告照明弾を浴び、更に赤尾礁を真近に三角波に逢い、正に転覆寸前、調査団一同肝をつぶす。その瞬間、私はこれも宿命かと脳裏を走る、しかし船長、船員の即座の機転で、船は元に戻るが、機関室が海水に浸りエンジン故障、その後船足が遅くなり調査日程も短縮せざるを得なくなった。

船上から魚釣島が見えても船足は依然として遅く予定の魚釣島には中々近づかない。このまま古賀村跡のキャンプ地に着いたとしても、其の後今日一日どれ程の時間に余裕があるか、調査が充分できるか不安になり、高良先生にお願いし、今船から最も近い魚釣島の海岸に降して貰うことにした。



「航海 2 つの恐怖 全く死ぬ思い 凶南丸だ捕と赤尾礁の浸水」遭難を報じる新聞。  
(琉球新報 1963.5.20)

## 魚釣島 単独調査 植物群落構造 6 パターン判別

高良先生に承諾して頂き、船長の協力を得て、東北岸部の砂浜に降ろしてもらい感謝一杯、東側の山頂部一帯は全く調査されてなく、調査するには最適の場所だった。

私にとって初めての魚釣島での単独の植生調査、チャンスを与えて頂いた先生に感謝、一人切りの島で、米軍払い下げのテントを張り、島唄を口ずさみながら、島の自然を堪能した事は云うまでもない。

日暮れても現地の植物が判別出来る間、海浜から陸域へかけて植生調査を繰返した。

翌日、夜明けと共に、前日調査が終了した海浜植生との接続地点から山頂への調査を始め。山頂へかけての調査は、斜面の起状が激しく地形の変化につれて出現植生も多様、しか

し時間に恵まれ予定通り山頂域まで無事調査することが出来、魚釣島の群落構造は 6 パターンから成ることが判明した。翌年「尖閣列島の植生」のタイトルで「琉大文理学部記要 理学篇第七号」（1964 年 5 月刊）に発表することができた。

昨今魚釣島はヤギ食害で、島の植生、生態系は破壊され、裸地が進行し、崩壊が進んでいるのは遺憾である。かつての魚釣島の自然、植物群落は被害を免れてどの程度残っているのだろうか。ヤギ食害で大半が絶滅していると考えられる。

魚釣島の本来の自然、群落構造は、往時の調査報告からしか知る術はない。

このようなことから、本調査で得られた魚釣島の群落構造を参考に供するため記す。

### 1、イヌマキーユウコ克蘭群落

此の群落は、島の山頂や尾根の風衝地に発達した群落である。斜面の鬱蒼とした森林地帯を通り抜け、一度尾根筋に出ると、眼前に展開する景観の相違に一驚、海岸から全斜面に成林していたビロウは急激に減少し、樹冠をそろえた密生叢の灌木林でシャリンバイ、ヒメシャシャンポ、ナタオレノキ、アデク、ハマヒサカキ、センカクツツジ、イリオモテラン、リュウキュウセキコクなどが多くの出現種によって群落が形成されている。



海拔 300m 付近の山頂部風衝植生 イヌマキーユウコ克蘭群落。その群落にあったセンカクツツジやイリオモテランなどは絶滅していると考えられる。（新納義馬 1963）

### 2、ビロウクロツグ群落

此の群落は魚釣島の森林の中で最も広い面積を占めている林分で、海岸の灌木林の後方から山頂にかけて全斜面蔽いつくしている。他の常緑樹林がなす樹冠から一際高くビロウが突出している景観は本群落の独特の相観といえる。林内はオオアマクサシダ、ナガミボチョウジ、ムサシアブミ、カクレミノ、ツゲモドキなど多くの樹種の出現が見られるがクロツグの出現が特に高く林床を特徴づけている。



魚釣島北側斜面の高林木、ビロウクロツグ群落。ヤギ食害で林内の植生破壊が更に進行すれば島の崩壊を引き起こすことになりかねない（新納義馬 1979）

### 3、シロガジュマルーアカテツ群落

隆起サンゴ礁に続いた砂浜の、海岸と山地斜面との境界を成すように発達した植生である。場所により隆起サンゴ礁に直接続いている山の斜面に発達している群落である。アダン

の混生している場合が多い。この群落に適合率の高い種としてオオバギ、ノアサガオ、クロミノオキナワスズメウリ、シロガジュマル、アカテツ、クワズイモ、トウズルモドキなどをあげる事ができる。

#### 4、クサトベラーモンパノキ群落

この植生は前述のシロガジュマルーアカテツ群落に接して発達している群落であるが直接海水の浸入を受けることはない。出現種数は少なく単純な群落である。題名の種類により他の海浜植生とは全く違った相観を示すので容易に識別できる。



海浜の低木群落のクサトベラーモンパノキ群落。ヤギの食害で無惨な景観に変貌しているのでは？（新納義馬 1963）

#### 5、シロバナミヤコグサークロイワザサ群落

クサトベラーモンパノキ群落の下位に発達している。特に共通種の生育も見られるが上記識別種の出現により相観を異にするので他の群落から容易に識別できる。

#### 6、サンゴ石灰岩（隆起珊瑚礁）群落

魚釣島におけるサンゴ石灰岩は島の北東側から北西側にベンチ状に発達し、サンゴ礁原特有の景観を持つ海浜植生が飛沫帯から陸域にかけて、イソフサギ群落→ミズガンビ群落→ソナレムグラ→コウライシバ群落→ボタンニンジン群落と大体帯状に発達している。

これらの各群落は風の強い満潮時には海水の影響を受けるものと考えられるが以下飛沫帯から順に各群落について説明を加えたい。

##### A イソフサギ群落

飛沫帯に続いて発達している群落でイソフサギ一種類からなる単純群落である。典型的な団塊植物で礁原の岩肌に密生し、飛沫帯から一定の距離をおいて発達している。

##### B ミズガンビ群落

イソフサギ群落に続いて発達し、かなり広い面積を持つ群落でミズガンビにより相観を特徴付けられているが、この植物は一尺足らず小灌木であるが、岩の割れ目に根を張り、枝をからませて匍匐し、地形に応じて特異の景観をつくる。琉球列島に広く分布する。

##### C ソナレムグラ→コウライシバ群落

前記群落に続いて発達する群落で、サンゴ石灰岩群落として極く一般的群落である。見た目は殆んどコウライシバの単純群落に見えるが群集標兆種であるソナレムグラは勿論テッポウユリやハギカズラも見られる。



## 補足：尖閣諸島・魚釣島 植物地理学上重要な島

ヤギ食害で 固有種・希少種 すでに絶滅していると考えられる

魚釣島での採集や現地で見つけた植物は維管束植物103科339種である。

これら自生植物の中には魚釣島の固有種センカクカンアオイ、センカクトロアオイ、センカクオトギリ、センカクハマサジ、固有変種センカクツツジ、ムラサキチヂミザサがある。

さらに日本では魚釣島のみに産する種にマルバコケシダ、マメヅタカズラ、タカサゴアザミ、コハナカモノハシなどがあり、琉球列島では魚釣島のみに産する種にオオミズゴケ、ノブドウ、ツタ、ヤブコウジ等がある。

魚釣島が分布の北限と考えられている種にボウカズラ、ヒメシシラン、ナンゴクキケマン、ケナシツルモウリンカ、テリハノギク、リュウキュウセッコク、イリオモテラン、オオキヌランなどがあり、魚釣島は植物地理学上重要な島である。

現在、魚釣島は、遺憾にことに、ヤギ食害で、島の自然、生態系は破壊され、これらの貴重な固有種、希少種などは、すでに絶滅していると考えられる。



右から 上：センカクカンアオイ、センカクトロアオイ 中：センカクオトギリ、  
センカクハマサジ 下：センカクツツジ、オオミズゴケ